

## 本 会 記 事

### ○研究委員会報告

機械翻訳研究委員会

(7月9日 14:00~16:00 於電子協会議室 出席者 14名)

(1) 日本語における Transformation とそのグラフ的解析  
伊東正安 (電機大)

実際の日本語 (慣用的用法の) は非常に面倒なものが多く、transformation ルールを機械を使った方がよいか分らない。

(2) 英語辞書一見出しの木構造 玉井陽子 (電試)  
見出しをリスト構造にする第一段階として、見出しの木構造につき説明した。

### ○EDPS 研究会

(6月8日 10:00~13:00 於日本電気 出席者 8名)

「空間電子計算機について」 森 俊二 (電試)  
現在稼動中の電子計算機は、すべてデータをシリアルにしか処理していないので、パタン認識とか偏微分方程式を解くといったように、各部分を並列に処理してもかまわないような問題では能率がよくない。これを解決するために、たとえば、各格子点ごとに独立な計算装置と記憶装置をもち、全部を並列に処理できるような機能をもった計算機が空間電子計算機 (special computer) である。名前からはエレメントが立体的に配置されていて、これが何か特別に有効な働きをするような印象をうけるがそうではない。

空間電子計算機の最初の構想は、1958年の SPAC で 32×32 の cell と 1600 の命令をもつもので、手書き文字を読むためのシミュレーションでは、IBM 704 は 5 秒/字、SPAC は 400 μ/字であった。

その後、各 cell が計算機になっていて、コントローラのない Holland Machine, 1962年コントローラが独立している偏微分が他の計算機より 200 倍くらい早くできるソロモンコンピュータ、PAU (Pattern attribute) が 2 次構造をもっている万能パタン認識電子計算機 ILLIAC III などがあるがまだ完成しているものはない。

パタン認識にとって有効な連想記憶装置は 1956 年

頃からその構想が生れ、現在では ATLAS などの一部実用になっている。その素子としては、超電導の原理を使ったクライオトロン素子が増えてもあまり価格が変わらないという点で大容量の連想記憶装置として注目されている。

### ○COBOL 研究会

(6月8日 14:00~17:00 於日本電気 出席者 6名)

(1) COBOL Confidential について各社の翻訳ルーチンのとる解釈をまとめた。

(2) COBOL の標準化について ASA は 3 レベル ↑ 9 モジュールの新提案を出し、学会の規格委員会が返事を出した。

(3) COBOL, Edition 1965 が入手できた。  
なお NEAC 2200 の COBOL を見学した。

### ○SC 研究委員会

(第 23 回, 6月 16 日 (木) 於船舶振興ビル 出席者 13 名)

(1) 電子協から「データ伝送を含む計算機システム」のテーマで研究委託をうけることにつき報告。

(2) 文献紹介

Time-Sharing システムにつき、つぎの文献紹介が行われた。

(i) J. McCarthy ほか: Time-Sharing Computer Systems, MIT Press, 1962. 井上委員

(ii) T.M. Dunn ほか: Remote Computing—An Experimental System, Proc. SJCC 1964

近辻委員, 武田委員

(iii) J.I. Schwartz ほか: A General-Purpose Time-Sharing System, Proc. SJCC 1964

大須賀委員

### ○情報処理月例会報告

5 月例会 (5 月 21 日 (火)) 於船舶振興ビル 10 階「HITAC 5020 モニタ」につき稲富彬氏 (日立中研) が報告した。出席者 46 名。

6 月例会 (6 月 21 日 (火)) 於船舶振興ビル 10 階「プログラムの教育」につきパネル討論会を行なった。パネリストは元岡氏 (東大) 他 6 名, 参加者 32 名。